ＩＳ　織斑一夏ともう一人

WING

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　織斑一夏ともう一人

【Ｎコード】
Ｎ２９１９Ｕ

【作者名】
ＷＩＮＧ

【あらすじ】
世界でもう一人『ＩＳ』を動かせる男がいた。
しかし、彼は人と何かが違っていた。生まれすら知らない彼はＩＳ学園でどう過ごしていくのだろうか・・・・。

プロローグ

俺はトラックに乗っていた。いや、トラックではなく、軍用の兵員輸送車にだ。
中には、ボロボロの男性が１５人程乗っていた。女性は一人もいない・・・・。
トラックは、森の中の細い道を走っていた。

「畜生、女の奴らめ、ＩＳが使えるからっていい気になりやがって・・・・・。」

一人の男が悪態をついた。
この世界では、女性の方が上だ。何故なら、ＩＳ（インフィニット・ストラトス）と呼ばれる宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツ呼ばれるのものがあり、
使えるのは女性だけだからだ。
しかも、ＩＳは現行の戦闘兵器の性能を大きく凌駕し、軍事バランスが崩壊。
製作した日本に、各国はＩＳ運用協定ーーアラスカ条約を結び、ＩＳの情報開示と共有、
研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止などが決められた。
だから、女性が多い＝国の有事の際の防衛力が強いとなる。
そのため、あらゆる国で女性優遇制度が施行され、女尊男卑の世界になった。

「だが、俺たちにはどうする事も出来ない・・・・・。」

別の男が弱々しく言った。

「弱気になるな！我ら、男性開放同盟は、かつての男の栄光を取り戻すために戦っているのだぞ！」

隊長らしき男が言った

言い忘れたが、こいつ等は、反女尊男卑思想を持つ、テロリストだ。

「しかし、われ等には、『彼』がいる。」

そう言うと、一斉に俺を見る。

だが、俺は『今更、男の一人や二人がＩＳを使える様になっても世界は変わらない。』

と思っている為、正直、こいつ等の行動が理解出来ない。

それに、こいつ等の命令の他に俺の中にはやるべき事がある。

「彼こそ、われ等が最後の希・・・・・・・・・・・・・・」

隊長の言葉は最後まで聞き取ることが出来なかった。

「うっ・・・・・・・。」

気がつくと、俺は道の脇の森の中に倒れていた。

辺りを見回すと、炎上するさっきまで乗っていたトラックがあった。

「（車両、原型をととめず。生存者、なし）」

「（！、ＩＳ反応。）」

木の陰の隠れると、ＩＳが二、三機降下してきてトラックを調査し始めた。
恐らく、さっきの攻撃はあいつ等がしたのだろう。
ＩＳは調査し終えると、そのまま上昇し、飛び去っていった。
俺は木の陰から出て、ＩＳが飛び去った方向を見ながら任務内容を確認した。

「（任務内容確認、任務、織斑一夏の確保及びＩＳ学園内の専用機のデータ収集
可能であれば専用機の奪取。）」

その後、俺は日本に向かった。

プロローグ（後書き）

こんにちは、作者です。
とうとう、三作品目を出してしまいました。
どうか温かい目で見てください。

第1話　入学のちょっと前

俺は日本に来た。来た方法は、見つからないように飛行機の貨物室に乗り込み
目的地に着くまで待つ。と言った、簡単な方法だ。
日本に着いたら、まずハッキングし、俺がこの国の国民である情報を入力することだ。
俺は空港の近くにある。建物のコンピューターから国の住民登録を改ざんし始めた。

「（性別、男。名前は・・・・・ＩＳにちなんで　瀬山勇（せやまいさむ）、と。
年は、織斑一夏と同い年にするか・・・・・。）」

作業を終えると、次に俺の能力を世間に知らせる為に、ＩＳがある企業に
見学と言う名目で入る手続きをした。

数日後

俺は、とある民間企業のロビーにいた。そこへ案内役らしい女性がやってきた。

「えっと、君が見学者だね？」

俺は、とりあえず普通の子供を演じた。

「はい。僕はこの会社に興味があって、見学しに来たんです。」

「そうですか。では早速、案内しましょう。」

その後、一通り見学した後、最後に特別にＩＳを見せてくれると言うのでそれに従い
厳重なロックの掛かった部屋に入った。

「これがＩＳです。初めて見ましたか？」

「はい。テレビでは見た事がありますが、実物は初めてです。」

そこには、一機のＩＳが鎮座していた。

「触ってもいいですか？」

「いいですよ。でも、女性にしか反応しないので触っても何にもなりませんよ。」

そんな事が言えるのも今のうちだ。

「へぇ、これがＩＳか・・・・・・。」

ＩＳに手をつけると、すぐにＩＳに接続した。

「（コアに接続。認識開始、終了まで、３，２，１・・・・認識終了。）」

すると、頭に色々な情報が流れ込んできた。同時に、ＩＳも輝き始めた。

「うわっ！」

驚いた子供を演じて、尻餅をついた。

「えっ！？ＩＳが反応した・・・・・どうして！？」

動揺を隠せない案内人を無視し、俺は内心笑っていた。

「（コア中枢にまでは接続不可、か。だが、ＩＳの基本プログラムを書き換えることは可能と判断。基本動作、攻撃方法などの操作の仕方、記憶完了。）」

「・・・・・・・・・・・・。」

「と、とりあえず。見学は終了ですが、ロビーで待っていてください・・・・・。」

俺は、指示に従いロビーで待機した。

その後、政府の関係者が来て、『ＩＳ学園』の入学手続きを置いて帰っていった。

入学しなければ、体のことを調べさせて貰う。と言う、脅迫じみたことを言い残して・・・。

「（体のことは、知られるわけにはいかない。力ずくで俺を捕らえようとしたら、消すだけだ。だが、その手段を実行いた場合、任務失敗の可能性が高い。

それに織斑一夏と言う人物を知りたいしな。）」

その後、俺は入学手続きを書いて、提出した。

第2話　クラスは女子ばかり

入学当日、俺は『一年一組』のプレートの教室前にいる。

「全員揃っていますねー。それじゃあＳＨＲをはじめますよー。」

中では副担任が自己紹介をしている。

中は、緊張感に包まれている。俺には、懐かしいような感じだか・・・・

「これから自己紹介を始めますが、その前に、急遽転入することになった、もう一人のクラスメイトを紹介します。どうぞ、入ってきてくださーい。」

俺は、扉を開けて中に入った。

すると、クラス全員の視線が刺さった。そんなに変か？

まあ、女子ばっかだしな。

だが、様子がおかしい。みんな驚いている感じだ。

「お、男？」

「先生。クラス分けの中にはいませんでしたよ？」

一人の女子が質問した。

「それが、瀬山君がＩＳを使えることが分かったのは、つい五日前なんです。

入学決定が、二日前なので、訂正のしようがなかったのです。」

かなり、急だったらしい。もっと早く行動すべきだったか・・・・・。

「あのー、瀬山君。あの空いてる席に座ってください。」

と言われたので、空いている席・・・・織斑一夏の後ろの席に座った。

「では、出席番号順に自己紹介をお願いします。」

俺は、昨日の電話帳のような参考書を記憶するのに疲れていたので、少し寝ることにした。

机に突っ伏していると、

「えー・・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

もう一人のＩＳを使える男である、織斑一夏が自己紹介していた。

「（あいつが織斑一夏、か。）」

俺は、その後、目を閉じてまた寝始めた。

「・・・・・・きろ。起きろ、瀬山！」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた。目を開けると、何かが高速で飛んできた。

「（！！）」

パシッ、飛んできた物をキャッチすると、それはチョークだった。

「（かなりの速度だ。しかも、なんて命中精度だ。）」

「ほう。掴み取るとはな。だが、お前は私の話をまったく聞いていなかったな。」

「・・・・・・申し訳ありませんでした。織斑先生。」

本当の事なので、ここは素直に謝っておくほうが良いらしい。

「ならいい。さっさと自己紹介をしろ。」

後ろでは、副担任の山田真耶先生が『お願いします。』と目で訴えていた。

「さっき、副担任の山田先生から紹介もあった、瀬山勇だ。これからよろしく頼む。」

・・・・・・何だ、『もっと話してよ。』って感じなのか？

しかも、織斑一夏や山田先生、織斑先生までそんな感じになってるとは・・・・。

「趣味は、無い。知り合いや友人もいないので、クラスに馴染めるか心配だがとりあえずよろしく頼む。」

「まあ、良いだろう。」

こんな感じで良いのか？その割には『期待外れだ』と言う感じが

あるのだが・・・・・・

第3話　幼馴染登場、授業開始

一時間目のＩＳの基礎理論授業が終わり、休み時間。
クラスや、上級学年の女子がちらちらと俺や織斑一夏を見ている。

「なぁ、えっと・・・・。」

「瀬山勇だ。」

「そうだった、勇。この雰囲気と視線は堪えないか？」

「気にしていたら肉体、精神的に持たない。第一、今の時代で自分たちと対等な
立場の異性がいたら好奇心が出るのは当たり前だろう。
人とは珍しいものに引かれやすいものだ。」

「そうだな。やっぱ慣れるしかないかぁ～。」

それ以外に何の方法があるのだと思いつつ、教科書を読む。
すると、

「ちょっといいか？」

一夏に話しかけている女子がいた。肩下まである黒い長髪を白いリボンで
ポニーテールにしている女子だ。

「・・・・・・・箒（ほうき）？」

一夏は知っているようだった。それも、かなり昔から。

「廊下でいいか？」

「お、おう。」

二人は廊下に出て行った。全員が聞き耳を立てているのだ、無駄だろうに。

俺は、意識を集中して二人の会話を聞いていた。

どうやら、女子の名前は篠ノ之箒（しののほうき）。ＩＳの開発者、篠ノ之束（しののたばね）の血縁者だろう。

他にも、剣道の全国大会で優勝したらしいとか、一夏とは幼馴染とかそういう情報もあったが、どうでもいい事なので記憶しなかった。

キーンコーンカーンコーン

二時間目のチャイムが鳴り、聞き耳を立てていた奴らは蜘蛛の子を散らすように席に戻っていった。着席していなかった一夏は織斑先生に出席簿で叩かれていた。

授業が始まった。山田先生が教科書を読み上げていく。その読み上げていく内容を聞き取り、記憶する。ノート？あのようなもの、取るだけ体力の無駄だ。

しかし、一夏の様子が変だ。さっきから周りの女子の様子を気にしているみたいだった。

「織斑君。どうしたのですか？」

一夏の不審な行動に気付いた山田先生がわざわざ聞きに来た。

「先生・・・・・。ほとんど全部分かりません。」

「ゑ・・・・・・全部、ですか・・・・・・。」

困り果てて発音がおかしい。なぜこの程度の事が分からない？

「えっと、織斑君以外で今の段階で分からない人はいますか？」

シーン・・・・・・・・・・・・・・

誰も手を挙げない。当然か、全員、事前学習くらいはしてあるはずだ。

「勇、分かるのか！？」

「当然だ。このくらい分からないと支障が出る。」

「・・・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました。」

パァンッ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。」

また叩かれる一夏。結構痛そうだ。

「あとで再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと・・・・・・」

「やれと言っている。」

「・・・・はい、やります。」

凄い気迫だな。さすがは世界最強。

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を凌駕する。そんな『兵器』を
深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうならない為の基礎知識と訓練だ、
理解できなくても覚えろ、そして守れ。規則とはそういうものだ。」

正論だ。正しいの一言に尽きる。
一夏は少し俯いた。何を思ってるのだろうか・・・・・・。

「『自分は望んでここにいる訳ではない』と思ってるな。」

理解不能。何故他人の思考が分かる？

「望む望まざる、人は集団の中で生きなければならない。
それが嫌なら人間を止める事だな。」

『集団の中で生きるのが嫌なら人間を止めろ』か・・・・・。要は
現実を直視しろと言う事か。

「瀬山。お前は今の状態をどう思う。」

「不満は無い。『人間』は一人では生きられない弱く脆い存在だ。だから集団を作り生き残ろうとする。一人で生きられる人間はそういない。」

そう『人間』ではな・・・・・。

「ほう・・・・・・・。」

織斑先生が感心したような声を出した。
すると、クラス全体から、『おお～』などと言う声が聞こえてきた。

「すごい、あの千冬様を感心させた！」

「一言一言にすごい重みと説得力を感じるわ！」

いっている意味が理解不能だが、満足したのならそれでいい。

「静かにしろ。山田先生。授業の続きを。」

「・・・・・・・・・。」

「山田先生？」

「は、はい。すみません。瀬山君がすごく大人っぽくてつい・・・・・／／／／／」

全く理解不能だ。俺がそんなに変なのか？
しかし、この人よく教師を続けられるな・・・・。

第４話　疑惑と飛び散る火花

授業の後。

「勇。なんていうかさ、凄いな。」

一夏が話しかけてきた。

「？、どういうことだ？」

「だってさ、あの千冬姉を感心させたし、なによりあの言葉は俺たちの年頃から出てくるような言葉じゃないしさ。」

「？？？。理解不能だ。当然のことを言ったまでだ。」

「・・・・・それと、なんて言うか、その喋り方、機械みたいだな・・・・・・。」

「俺は、人間だ。これは口癖だ。」

そう答えたが、俺はおかしな感覚に戸惑っていた。

何故だ。なぜこいつは俺の思考の奥を見抜くようなことを言うのだ？

だが、悪い感じじゃない、むしろ心地よい。

なぜだ、何故俺はこいつに全てを打ち明けてもいいと思うんだ？

「・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたんだ？」

「何故だ、何故だ、何故だ、何故だ・・・・・・・・・・。」

「お、おい、本当にどうしたんだ！？」

「はっ！？すまない。脳回路の調子が狂ってるみたいだ。」

俺は、いつもの調子を取り戻すのに４～５分掛かった。

ＳＩＤＥ・・・一夏

勇に授業中の事について話したがびっくりした。
いきなりうわ言のように言い出したからなぁ。まぁ、元に戻ったからいいけど、

「（でも、何か人っぽく無いんだよなぁ・・・・）」

そう思ったのは、まず今の表情を崩さないからだ。
笑ったり、驚いた顔を見た事が無い。それに、なんか機械的なんだよなぁ
よく分からない勇の違和感に悩んでると、

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「・・・・・・。」

一人の女子に話しかけられた。金髪に綺麗なブルーの瞳の白人の美人な女子生徒だ。

「訊いてます？お返事は？」

「その音量なら十分に聞き取れる。何のようだ？」

勇はやっぱり、感情のこもってない機械みたいな冷たい声で返事をした。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですからそれ相応の態度と言うものがあるんではないでしょうか？」

「話しかけてくれと頼んだ覚えない。」

勇は冷たく返す。

「悪いな、俺、君が誰か知らないし。」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして入試主席のこのわたくしを！？」

なるほど、セシリアって名前なのか。それよりも。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。

」

「代表候補生って、何？」

ガタンッ！数人の女子生徒がずっこけた。え、知らないとまずいの？

「あ、あ、あ・・・あなた本気でおっしゃっていますの！？」

凄い剣幕で怒り出した。殺されかけそうになるくらいの怒り度だ。

「国家代表候補生。国家代表ＩＳ操縦者候補生として選ばれる人間の事。

分かりやすく言えば、エリート。そのほとんどが専用機持ち。」

勇が辞書に書いてあるような言葉をすらすらと言った。

「なるほどな。」

「そう、エリートなのですわ！」

髪をかき上げ、俺と勇を指差す。

「本来、わたくしと同じクラスになれただけでも奇跡・・・幸運なのよ。

それを理解してくださる？」

「そうか、それはラッキーだな。」

「俺は貴様と一緒になれてうれしいとは思っていない。」

「・・・・・・馬鹿にしてますの？」

勇の一言に怒ったのだろう。

「第一、ＩＳについて何も知らないのによくこの学園に入れましたね。
男でＩＳを操縦できると聞き、少しは知的さを感じさせるかと思ってましたが、
期待外れですわ。」

「期待してくれと頼んだ覚えは無い。」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも
優しくしてあげますわよ。」

この態度で優しいのか？初めて知ったぞ。

「ＩＳで分からない事があれば、泣いて頼まれたら教えてもよくってよ。
何せ、わたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートなのですから。」

へぇ～。・・・・って、あれ？

「俺も、教官倒したぞ。勇はどうなんだ？」

「その事の記録は残っていない。答えは不明だ。」

「そ、そうか。」

やっぱり人っぽくない。ここまでだと人間なのかすら疑わしいぞ。

「わ、わたくしだけと聞きましたが・・・・。」

「女子ではってオチじゃないのか？」

すると、地雷を踏んだらしくセシリアの顔が赤くなった。

「あなた、わたくしをぶじょ・・・・・」

キーンコーンカーンコーン

三時間目のチャイムが鳴った。

「またあとで来ますわ。絶対に逃げないことね！」

セシリアがそう言い残して、三時間目が始まった。

第5話　決闘宣言

三時間目。この時間は織斑先生が担当するみたいだ。

「それでは、この時間は実践で使う各種装備の特性について説明する。」

要は武器などの説明か。一応記録はしておくか・・・。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。」

一夏は、また何か分からないようで、首をかしげていた。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の会議や委員会の出席などのクラスに関わる仕事をする。ちなににクラス対抗戦は、入学時の実力推移を測るためのものだ。今はたいした差はないが、競争心を生む。決まったら一年間変更はないからそのつもりで。」

教室内がざわついてきた。すると一人の女子が手を挙げた。

「はい。私はお織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思いま～す。」

「じゃあ、私は瀬山君を。」

「わたしも。」

一人が言い出し、さらに数人が俺や一夏に票を入れた。

「候補者は織斑一夏に瀬山勇・・・・他にいないか？自薦他薦は問わんぞ。」

辞退は不可能だな。他薦された者に理由をつけて辞める権利は無い。

「お、俺！？」

無駄な事を・・・・。

「織斑、席に着け、邪魔だ。いないのか？いないなら二人で決めるが。」

「俺はやるって言ってな・・・・・・・」

「座れ、馬鹿者。自薦他薦は問わないと言ったはずだ。」

一夏は納得してない感じで座った。

「なら、この二人のＩＳ戦闘で決めさせてもらうぞ。」

閉めようとした時、さっきの奴、セシリアが立ち上がった。

「待ってください！納得いきませんわ！」

バンッ　と机を叩き不満が炸裂した。机にひびが入りそうだ。

「そのような選出は認められません！男がクラス代表なんて、いい恥さらしですわ！
わたくしに、セシリア・オルコットにそのような屈辱を
一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

いかにも現代の女尊男卑の考えだな。反論すると面倒だ、無視に限る。

「実力からいけば、わたくしが代表になるのは必然！
物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！
わたくしはここにＩＳの技術を学びに来たのであって、
サーカスを見に来たのではございませんわ！」

まったくうるさい奴だ・・・・・。

「大体、文化的にも後進的なこの国で暮らさなければならないこと自体、
わたくしにとっては耐え難い・・・・・」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

一夏が反論した。なぜだ？なぜそこまで怒る？怒る理由が分からない。

「あ、貴方、私の祖国を侮辱しますの！？」

「たかが国の事で何を熱くなってるんだ？理解不能だ。」

あまりのうるささに俺まで口を挟んでしまった。

「貴方は自分の国のことはどうでもいいのですか！？」

国？そんなもの、俺には関係ない。

「第一、侮辱し始めたのはそっちだ。一夏はそれに同じ侮辱で反論しただけだ。

もっとも、俺には怒る理由が理解不能だがな。」

「決闘ですわ！」

セシリアが俺と一夏を指差し宣言した。

「いいぜ、受けて立ってやる。」

「・・・・・好きにしろ。」

どっちにしろ拒否権は無いんだ。

このまま奴のＩＳのデータを収集しよう。

「やるなら本気で来い。手加減は一切無用だ。」

「お、勇。お前もやる気だな。」

何を言ってるのだ、こいつは？

「俺は奴の実力を知りたいだけだ。別に国の事で決闘に受けて立った訳ではない。」

専用機持ちのデータは価値が高い。逃す手がない。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い・・・・・
いいえ、奴隷にしますわよ。」

にらみ合う一夏とセシリア。
俺も睨まれたが、受け流した。

「話はまとまったようだな。それでは、勝負は一週間後の月曜日。
第三アリーナで行う。三人ともそれぞれ準備をしておくように。
それでは授業を始める。」

話が終わると、織斑先生は授業を開始させた。

「（まずは、使用する訓練機に慣れることから始めるか。）」

その後、セシリアからの視線が刺さったが気にせず授業を受けた。

第6話　決闘まで・・・・

部屋で荷物の整理をしていたら、すぐに一時間たった。
俺は職員室に行った。

「織斑先生。瀬山勇です。」

「来たな。こっちだ。」

職員室にはいると織斑先生がいた。机にはＩＳの基本性能は表示された
情報端末があった。

「さて、使用するＩＳだが。ここにあるのは『打鉄（うちがね）』と『ラファール・リヴァイル』の二機種だ。どれを使用する？」

俺は『打鉄』と『ラファール・リヴァイブ』の性能を見比べていた。
『打鉄』は安定した性能を持ち、防御力に優れた日本製の二世代型量産機。
『ラファール・リヴァイブ』は操縦性、汎用性に優れたフランスのデュノア社製の二世代後期の量産機。
見比べた結果、

「『ラファール・リヴァイブ』の使用許可を。」

「試験の時に使用した『打鉄』じゃなくていいのか？」

「その機体は、武装が少なすぎる。それに今回は防御力など不要だ。

その点から比べると『ラファール』の方が『打鉄』を使用した時より戦闘に勝つ確立が高い。」

「・・・・・・分かった。では、この書類にサインしてもらう。」

といって、数十枚の紙が手渡された。

「今の時刻は、五時四十分だ。六時までに書いて渡すように。私の机を使って書くといい。」

一枚、一分。ギリギリだな。

「六時ジャスト。まあ、良いとしよう。」

六時ちょうどに書き終えて、提出完了。結構きつかった。

「では、明日からの使用を許可する。」

「了解しました。」

明日から訓練、少しでも奴の本気に耐えられる実力にまで行かないとならないな。

「言っておくが、オルコットは代表候補生だ。勝つ見込みは少ないぞ。」

「構わない。奴の本気を見れればそれでいい。その為の訓練だ。」

「そうか・・・・・ならいい。せいぜい頑張るんだな。」

「了解。」

俺は一礼して職員室から出た。

「（肉体が重い。なぜこんなに早く疲労が溜まるのだ？）」

さっさと部屋に戻り、明日の訓練に備えた。

次の日

授業が終わり、俺はアリーナに向かった。

『ラファール』を装備し、アリーナに出た。

「（まずは、前に取ったデータ通りに動くか確かめてみるか。）」

俺は、基本的な動作、上昇、下降、旋回などを何回か繰り返してみた。

「（・・・・大きな違いは無さそうだ。次は武装確認と。）」

武装一覧をで出して確認すると、

「（マシンガンが一つ、接近ブレードが一つと、グレネードランチャーが一つ、か）」

見事なまでに実弾兵器ばかりだった。

ビーム兵器は一つくらい欲しかったがこの際仕方ない。

「（作戦を立てるか・・・・。）」

俺はこの日から決闘まで、毎日、放課後訓練をした。
そんな感じで過ごしていたら、あっという間に一週間がたった。

第7話　『白』来る！

対決の日、俺は一夏、箒と共に第3アリーナにいた。

「・・・・なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「ＩＳのことを教えてくれる話はどうなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・」

「目　を　そ　ら　す　な。」

どういう事だ？話の先が見えない。

「何があったんだ？」

「箒がさぁ。この一週間ずっと、基礎体力の訓練しかさせてくれなかったんだ。」

「し、仕方ないだろう。お前もＩＳがないのだから。」

「ＩＳなら使用許可を貰って使用可能だぞ？それに、ＩＳがなくても基礎知識などは教えれたはずだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「目　を　そ　ら　す　な　っ。」

・・・・・頭が痛くなる。何故このような初歩的な事が出来ないのだ。

「お、織斑君織斑君織斑君っ！」

「山田先生。走っている時に叫ぶと余計に体力を消耗します。まずは落ち着いて深呼吸をする事を提案します。」

「は、はいっ。す～～～～はす～～～～～～。」

「はい、そこで止めて。」

「うっ・・・・。」

一夏、それは効果が無いと思うが？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・ぷはぁっ！まだですかあ！？」

正常な肺活量だな。

「目上の者には敬意を払え、馬鹿者。」

パァンッ。今日も出たな、出席簿アタック。

「千冬姉・・・。」

パァンッ。もう一撃追加。一夏が痛さのあまり涙目になってる。

「弟とじゃれ合って微笑ましいです・・・・・・。」

ゴスッ！（織斑先生が出席簿の『角』で俺を叩いた音）

「ーーーーーーーーーーー！！！！！！！（声にならない叫び）」

ゴロゴロゴロ（痛さのあまりに床を転げまわる音）

「誰がコイツとじゃれ合っていた。」

「す、すみません。（あ、圧力センサーが大変な数値を記録してたぞ・・・・・）」

「勇、大丈夫か？」

「問題、無い。それより用件とは？」

「そ、それですね。来ました。織斑君の専用ＩＳ！」

俺は耳を疑った。

「（奴に専用機だと！？　任務追加、内容、織斑一夏のＩＳのデータ収集。また、性能によってはＩＳの奪取。それまではデータ収集を最優先とする。）

より任務が難しくなったみたいだ。失敗は許されない。

ＳＩＤＥ・・・一夏

ゴスッ！

「ーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

勇に出席簿アタック（角）が炸裂！

勇は痛さのあまりにゴロゴロと床を転げ回っている。あれは痛いだろうな。

それよりも

「（やっと勇の感情が見れたな。）」

入学して初めて勇の感情らしい感情を見れた。

勇がロボットだと思った俺がバカみたいだった。

「勇、大丈夫か？」

「問題、無い。それより用件とは？」

復活早っ！俺だったら後二分・・・いや、気絶しているかもしれない位の攻撃だったぞ。

「そ、それですね！来ました！織斑君の専用ＩＳ！」

・・・・・・え？

俺専用のＩＳ？いきなりの事で頭がついていけない。勇も顔には表れてないが

驚いていると言うのが雰囲気で分かる。

「織斑。すぐに準備をしろ。アリーナの使用時間は限られてる。ぶ

っつけ本番でものにしろ。」

あの～。俺、ＩＳのこと何にも知らないんですけど・・・・

「この程度の障害、男子なら乗り越えてみせろ、一夏。」

箒、この障害を大きくしたのはお前のせいだからな！？

そんな事を考えているうちに、俺はピット搬入口に連れられていった。

防御壁が開くと

ーーーーーーそこに『白』が、いた。

第7話　『白』来る！（後書き）

遅くなり非常に申し訳ありません。
なるべく早く更新できるように、今後は精進して行きたいです。

第8話　不安定なココロ

ＳＩＤＥ・・・勇

俺たちの目の前には、真っ白な一夏専用のＩＳがあった。
飾り気が全く無く、純白のＩＳだ。正直、ここまで美しいＩＳは見たことが無い。

「これが・・・・。」

「はい！織斑君専用ＩＳ『白式』です！」

『白式』と言うのか。記録しておこう。

「すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。」

これはまた無茶な。相手が相手だ、瞬殺されかねないぞ。
一夏は、白式を装着していた。フォーマットとフィッティングが開始された。

「（その前に、初期状態でのデータを採取するか。）」

俺は、みんなから少し離れて

「（スキャンモード。スキャン開始。）」

一夏の白式のデータを採取し始めた。

「（これとった特徴はなし。これ以上データを採取するのは非効率的と判断。）」

採取を終了しようとした時、一夏がいきなり振り返った。

「どうした？」

「今、目の色が変じゃなかったか？」

ちっ、スキャンモードの特徴、目が青白く光ってしまう点に気付いたのか。

「何を緊張しているのだ？相手は代表候補生だからか？」

「いや、なんでもない。ハイパーセンサーの不具合みたいだ。」

「緊張しすぎだ。気楽に行って来い。」

ポンと肩に手を置き、緊張をほぐしてやる。

「ああ、じゃ、行って来る。」

そう言うと一夏はピットから出て行った。

「瀬山、ちょっと廊下に来い。」

一夏の試合を見ようとした時、織斑先生に呼び止められた。

「了解。」

とりあえずそう応えて。廊下に出た。

ＳＩＤＥ・・・千冬

私は、瀬山を廊下に連れ出した。気になる事があるからだ。

「何ですか？」

「さっき、一夏がＩＳを装着している時、何をしていた？」

一夏が『目の色が変』と言っていた事が気になってしょうがない。ＩＳのハイパーセンサーが不具合を起こすはずが無い。

「何の事ですか？何もしてませんよ？」

しらを切るが、私にはもっと気になる事があった。まず、言動がおかしい。世間の常識はあるみたいだが、人としての常識がない。この前は女子と風呂に入る事にすら首をかしげていたぞ。さらに、感情が無い。性格が寡黙なのかもしれないが、それでも感情が無さ過ぎる。

「これ以上話す事が無いなら、戻って試合を観戦します。」

「待て、まだ聞きたいこ・・・・。」

「？　どうしたのですか？」

「いや、なんでもない。戻っていいぞ。」

瀬山が戻ろうとしたので肩を掴んだが、手を放してしまった
なぜなら、
「（なんて冷たい体なんだ！？）」
体が氷のように冷たかったからだ。服を着ているとはいえ、あの冷たさは異常だ。
「（奴は、人、なのか？）」
瀬山を監視までは行かないが、少し目を付けないとならないみたいだ。

ＳＩＤＥ・・・勇

「（何なんだ、この気持ちは。怯えているのか？　この俺が？）」
何故俺が怯えているのだ？　相手が世界最強だからか？
俺がここに来た目的が知られそうになったからか？
・・・・・・分からない。
ここに来てから俺の心理状態は不安定になる一方ではないか。
任務の延期、中断も視野に入れるべきか・・・・。
モヤモヤとした感じで戻ると既に一夏がセシリアと戦闘を開始していた。
見た目でのセシリアのＩＳの特徴は鮮やかな青の機体。
あとは、背に四枚の特徴的なフィン・アーマーがあるくらいだ。

武装は、二メートル超えの大型レーザーライフルと、
自立機動兵器が四機が展開されいた。

「（取り付けたデータ収集用のマシンの作動を確認。異常は見られず。）」

さっき、肩に手を触れた時に取り付けた極小サイズのデータ収集用マシンの
作動を感知していた。
これで一夏の白式のデータをリアルタイムで収集できる。
セシリアのＩＳは、実際に戦いながら取るとしよう。
後はのんびりと観戦でもするか。

第9話　白式光臨！

ＳＩＤＥ・・・一夏

戦闘を開始してから何分、いや、何秒たったのだろう。
とにかく、俺はひたすら防御に徹するしかない。
何故なら、武器がブレード一本しかないからだ。

「なかなかしぶといですわね。褒めて差し上げますわ。」

「そりゃどうも・・・・・。」

セシリアはまだまだ余裕のようだ。
俺はかろうじて戦えるといった状態だ。

「この『ブルー・ティアーズ』を前にして、こんなにも長く耐えたのは
貴方が初めてですわ。」

そう言うと、自分の周りに浮かんでいる四つの自立機動兵器『ブルーティアーズ』
を撫でた。・・・機体名と同じかよ。ややこしいからビットでいいや。
それにさっきから気になる事がある。

「（誰だ？　誰かが俺を『視ている』）」

ハイパーセンサーには反応は無いが、感覚で分かる。誰かが俺を視ている。

だが、今はそれよりも、この状況をどう抜け出すかを考えよう。

「では、閉幕（フィナーレ）と参りましょう。」

右腕をかざすと、、ビットが二機多角的な動きで接近してきた。
そして、レーザーを放つ。俺はそれを防御、回避するが、その隙に
セシリアのライフルが
飛んでくる。そして、それを避けるか防御する。その繰り返しだ。

「左足、いただきますわ。」

ヤバイ！　ＩＳバトルはシールドエネルギーを０にすれば勝ちだ。
そして、ＩＳには『絶対防御』と言う操縦者を死なせないようにする能力があり、
全ての攻撃を受け止める代わりエネルギーを大量に消費する。
今、左足には装甲が無い。そこに当たれば絶対防御が発動して、
俺のシールドエネルギーはゼロ、つまり、負けだ。

「ぜあああっ！！！！」

一かバチか無理やり加速をした。
ガギンッ、と金属同士がぶつかる音を出しながらセシリアに正面
から体当たりをした。
おかげで砲口がそれて、とどめの一撃を免れた。

「くっ！　無駄な足掻きを！」

セシリアは距離をとり、右手を横に振った。
するとビットが飛んできてビームを放った。

そうか、分かったぞ。

放たれたビームを避けて、ビットを斬り落した。
そして、セシリアに攻撃を加える。

「くっ・・・・・！」

それを後方に回避し、また右手を振り、別のビットが二機飛来した。
飛来したビットを斬り落して言った。

「このビットはお前の命令がないと動けない、そしてビットを使っている間は
操作に集中してその攻撃以外できない、そうだろ？」

「・・・・・・・・・・！！」

図星のようだ。しかもさっきの攻撃でビット攻撃の動きが分かった。
あれは、俺の一番反応が遅くなるところを狙ってくる。
いくら３６０。が見えるとはいえ、操作しているのは人間だ。
後ろ、真上、真後ろなどは、一回脳で判断するからコンマ数秒遅れる。
セシリアはそこを突いてくる。
だから、わざと隙を見せればそこを狙ってくる、俺は待ち伏せて攻撃すればいい。

「（あとは集中するだけだ・・・・・）」

セシリアのＩＳは中距離射撃型。距離を詰めれば近距離型の俺の

ほうが有利だ。
セシリアには近接用の武装はなさそうだ。・・・・この勝負、勝てる。

ＳＩＤＥ・・・・千冬

「はぁぁ・・・・・・。凄いですねぇ、織斑君。」

山田先生がため息混じりにそう呟いた。
だが、私は一夏が浮かれている事に気付いた。

「あの馬鹿、浮かれているな。」

「何で分かるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしている。あのクセが出る時は大抵、簡単なミスをする。」

「へぇぇ・・・・・・。流石、姉弟ですね。」

正直、照れる・・・・・・。

「ま、まあ。あれでも一応弟だからな。」

「あー、照れてます？照れてますねー。」

ブチッ。

「私はからかわれるのが嫌いだ。」

私は山田先生にヘッドロックを喰らわせていた。

「いたたたたっっ！分かりました、分かりましたから離し・・・あうううう！！」

騒ぐ山田先生を無視し、ちらりと横を見た。

視線の先には、モニターを見つめる篠ノ乃と瀬山がいた。

篠ノ乃は一夏を心配しているような感じで見てるが、瀬山は違った。

モニターは見ているが、心は此処に在らずという感じだ。

何を思っているかは分からない。

だが、目を付けないといけないのには変わらないみたいだ。

ＳＩＤＥ・・・・勇。

戦況は一夏の防戦一方だ。

俺は、付けたマシンから送られてくるデータを見ていた。

「（最適化、９０％まで完了。

・・・・驚いた、拡張領域（バススロット）が既に満杯だ。何が量子変換されてるのだ？

一次移行（ファースト・シフト）を待つしかないみたいだ）」

はやく一次移行しろと願った時、試合が動いた。

一夏が距離を詰めたとき、セシリアが、にやりと笑った。

すると、腰部から広がるスカート状のアーマーの突起が外れ、飛んでいった。

『弾道弾（ミサイル）』のようだ。

一夏の回避は間に合わない、その時、待っていたデータが来た。

『最適化、１００％完了。』

と同時に、

ドガァァァァンッ！！

一夏にミサイルが着弾し、派手に爆発した。

「一夏っ！」

モニターを見ていた篠ノ乃が声を上げた。

「・・・・・・ふん。」

黒煙が晴れた時、織斑先生が鼻を鳴らした。

「機体に救われたな、馬鹿者め。」

残っていた煙が吹き飛ばされた。

「（来た。）」

心の中でそう呟いた時、あの白式が現れた。

真の姿で・・・・・・・・。

第１０話　敗北、そして初笑い

ＳＩＤＥ・・・一夏

『フォーマット、フィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。』

「（なんだ？　どうすりゃいいんだ？）」

ＩＳから意識に直接データが送られてきた。
目の前に現れたウインドウの真ん中に『確認』と表示されたボタンがある。

「（とにかく、押せば、いいんだよな？）」

よくあるアニメみたいにボタンを押したら、ボンッ、と爆発するなんて事はないと思う。
恐る恐るボタンを押したら、ＩＳに劇的な変化が起きた。
ＩＳの装甲が光の粒子になり消えて、全く違う形をした装甲になっていた。

「これは・・・・・」

さっきまでボロボロだった装甲は消え、新たに洗練された装甲に変化していた。

「まさか、一次移行（ファースト・シフト）！？　あ、あなた、
今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！？」

なるほど『初期化』と『最適化』が終わったという事は、
この機体はやっと俺専用になったということだ。
そして、一番驚いたのは、たった一つの武器が、
『近接特化ブレード・雪片弐型(ゆきひらにがた)』
かつて、千冬姉が使用していた太刀『雪片(ゆきひら)』
とほとんど変わらない形と名前だったことだ。
「はは・・・。・・・俺は最高の姉さんを持ったよ。」
「は？何を言って？」
この武器を持ったということは、千冬姉と同じ位置に立ったということ、
「これを持ったからには、千冬姉の名前を守らないとな！」
元日本代表の弟が不出来なんかじゃ、格好が付かない。
「さっきから何の話を・・・・・ああもう！　面倒ですわ！」
再びビットが襲い掛かってくる。
だが・・・・・・
「（見える！！）」
ガキンッ！
飛んできたビットを斬り落す。

両断されたビットは慣性に従い、俺の横を通り過ぎて、爆発した。
爆発と同時に俺はセシリアに突撃した。機体の瞬間加速、センサーの解析度は
さっきとは比べ物にならない。

「うおおおおおおおっ！」

雪片弐型にエネルギーが集まっていくのが分かる。すると、雪片の刃が光を帯び始めた。

「（いける！）」

セシリアの懐に飛び込み、斬撃が当たる寸前、

『ビーッ！　試合終了、勝者、セシリア・オルコット』

は？

俺も、セシリアも唖然としていた。
ピットの方を見ると、山田先生と箒も同じような状態だった。
勇は・・・・・変わらず無表情だ。千冬姉は「やれやれ」といった顔をしている。
結局、なにがあったのか分からないまま、俺は負けた・・・・・・・。

◇

「良くもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者。」

ピットに戻ってきて待っていたのは千冬姉のキツイ言葉だった。

『馬鹿者から大馬鹿者に進化した！』

某黄色い電気ネズミが有名なモンスター育成ゲームならそう言ってそうなランクアップだ。

すげえ嬉しくないけど・・・・。

「なんで俺・・自分は負けたんですか？」

「ああ、それは・・・・・」

「白式の唯一の武器の特性を知らなかったからだ。」

勇がそう言ってきた。雪片弐型の特性？

「白式の武器は、自身のシールドエネルギーを削って発動するのだろう。

事実、あの剣が光を帯びた時、お前のシールドエネルギーが急激に減っていった。

違いますか、織斑先生？」

「そうだ。お前の武器、雪片には特殊能力としてバリア無効化が備わっている。」

バリア無効化？　なんだそれ？

「仕組みを簡単に言うと、相手のシールドを切り裂き本体に直接ダメージを与える

と言う事だ。そして、その攻撃が当たるとどうなる？」

えーっと、確か・・・・何が発動するんだっけ？

「絶対防御が発動し、大幅にエネルギーを削る事が出来ます。」

箒がサラリと言った。ヤベェ、俺、何にも分かってねぇ・・・・・・・・・。

「そうだ。かつて私が世界一になったのもこの能力のお陰だ。あとは瀬山の言った通り
それを発動するには自分のエネルギーを攻撃に変換する。だから負けたのだ。」

そうだったのか。だから負けたのか。

「付け加えると、その能力の代償として武器の処理能力をそれ一つに集約している。
その分、威力は知る中ではトップクラスだ。」

たった一つの武器で世界一になったのか、改めて格の違いを思い知らされる。
やっぱり、千冬姉は凄い。

「なあに、余計な事を考えてやるより一つの事を極める方がお前には向いているさ。
なにせ、私の弟だ。」

そう言って今日は解散となった。

帰り道、俺は渡された『ＩＳ起動におけるルールブック』を見て

唖然としていた。
どこの電話帳だよ、これ！何ページあるんだよ・・・・・・・・・・。
白式は戦いの後待機中の状態となり、今は俺の右手首のガントレットになっている。
普通はアクセサリーらしいのだが、ガントレットは防具の類だ。
何処まで異常なんだよこのＩＳ・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ジロジロ）」

なぜか、さっきから箒がじろじろ見てくる。

「な、なんだよ？」

「負け犬。」

ぐあ・・・・。それが敗者に対する配慮かよ・・・・。
あれか、死者をＨＰ１で回復させて敵だらけのダンジョンに装備無しの状態で送り出す
ぼったくり神父か！？

「今、私の悪口を考えていたな？（ギロッ）」

「シテナイヨ。ソンナコト？」

はっ、しまった！　突然の事でカタコトになってしまった。
すると箒は「ふう・・・・。」といいながら竹刀を抜いた。
まさかと思うが、その竹刀で幼馴染を叩くなんてことはしない、
なんつって・・・

バシィッ！

「いってぇ！本当に叩きやがった！」

「バカがいたので叩いた。」

こいつには手加減とか慰めるとかいった考えはないのか！？

「・・・・はははははっ。仲良いな、二人とも。」

えっ？

間違いじゃないなら、今、笑ったよな？

箒も驚いた表情をしている。どうやら、見間違いじゃないみたいだ。

「勇。お前、やっと笑ったな。初めてお前の笑いを見たぞ。」

「全くだ、初めて見たとき『お前は人か？』と思ったくらい無表情だったのにな。」

「ッ！！」

すると、勇はハッとして口を右手で押さえ走って行ってしまった。

「なんだ、どうしたと思う一夏？」

「さあ？　そんなに笑ったところを見られたのが恥ずかしかったのかな？」

俺達は二人して首を捻っていた。う～ん。なんだったのだろう？

第１０話　敗北、そして初笑い（後書き）

完全一夏サイドの話でした。
次回くらいから勇とセシリアの戦いを書こうと思います。

次回をお楽しみに！
感想をお待ちしま～す！

第１１話　混乱、迷い

ＳＩＤＥ・・・勇

気付いたら、俺は走っていた。
俺が初めて笑った。一夏にそう言われた時、戸惑い、混乱が俺を支配した。

「（なぜ、笑った！？テロリストになった時、不要な感情は捨てた。初めて人を傷つけた時でさえ何も思わなかった・・・なのに！なぜあの二人のじゃれ合いを見たとき笑ったんだ！？）」

ずっと頭の中で自問自答する。
普段の俺ならこんな事はしない。こんな事をしても解決しないからだ。

「（俺は何をしにここに来た？　一夏のＩＳや学園に存在する専用機のデータを
収集する為に来た筈だ！俺は、戦闘マシーンだ。感情なんか無いんだ！）」

自分を一喝し、混乱した気持ちを無理矢理落ち着かせる。
気が付くと、いつの間にか自分の部屋の前に来ていた。

「（今日は、もう寝よう・・・・。）」

そう思い、ドアを開けたら、

「おかえりなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・

た・し？」

よく分からない事を言いながら、生徒会長、更識楯無がよく分からない
格好（服を着ず、エプロンのみ）で立っていた。

「・・・・・・何の用だ？」

そう言いながら、部屋に入りベットに腰をかけた。

「あれ～？普通の男子ならこの裸エプロンで一撃ＫＯなのにな～？」

正直、それに関することは全くと言っていいほど知らないし、知る気もない。

「現ロシア代表、学園内最強とあろう人物がただの一年男子の部屋に来るのだ？」

「だって、瀬山君は『世界に二人しかいないＩＳを使える男子』の一人なんだよ。
興味があって・・・・」

「嘘（ブラフ）だな・・・・。本当の目的は、俺の観察又は監視、危険なら排除するために来たのだろう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

楯無は何も言わない。図星を突かれた訳でもないみたいだ。

「事実、更識家はこう言った闇の部分・・・・暗殺や諜報関係のこ

とを請け負って来た筈だ。
お前の身のこなし、気配の殺し方が何よりの証拠だ。」

とりあえず、楯無を見たときから分かった事を全て話した。
すると楯無は「ふう・・・」と息を吐いた。

「正解よ。まあ、排除なんてしないけど、監視を頼まれたのは確かよ。」

「誰にだ？」

返ってくる答えは知っているし、誰に頼まれたのかは分かる。

「それは、ヒ・ミ・ツ。」

「ふっ・・・はははは！」

「笑う事無いでしょ？」

・・・・・・まただ、また無意識の内に笑っていた。
でも・・・・・ずっと昔にもこうやって笑っていた気がする。誰かと一緒に・・・・・・。
心地良い。ずっとこうしていたい。任務など、放棄してしまいたい・・・。

・・・・・・・・・・違う

・・・・・・・・・・違う！違う！違う！違う違う！　俺は任務

のために来たんだ！
俺に、このような感情は無いはずだ！　なぜだ！
なぜここに来て一夏やその周りの人々と触れ合う度に、俺の精神はこうも揺らぐのだ！

「・・・・・・君？瀬・・・君？瀬山君？」

はっ、とすると俺の顔を覗き込む楯無がいた。

「何だ？」

「何だじゃないわよ。いきなり難しい顔をして黙り込むんだから。」

もう、内面に隠し切れないほど精神が不安定なのか・・・・・。

「すまない、ここ最近調子が悪いんだ。」

「なら、おねーさんが看病をしてあげちゃうわよ。」

「・・・・・・好きにしろ。俺はもう寝る。間違っても一緒に寝ようとはするな。」

そういってベットに入った。制服は面倒なのと精神的、肉体的に限界だったので脱がずに入った。
明日は、セシリアとの対戦だ。データ収集を最優先に、勝敗は・・・・どうでもいいか。

ＳＩＤＥ・・・セシリア

今日の模擬戦が終わった後、私はシャワーを浴びていた。
でも、何かすっきりとしない。モヤモヤとする。

「（今日の試合、なぜあの男子のエネルギーが急になくなったのかしら？
わたくしが勝ったのに、何かすっきりとしない。）」

腑に落ちない。

「（・・・・・織斑、一夏・・・・・・）」

あの男子を見ていると、父の逆を見ているよう。
母は女尊男卑社会の前から多くの企業で成功を収めた。
そんな名家に婿入りしたせいか、父はとても気が小さく、母の顔色ばかり伺っていた。
『将来、情けない男とは結婚しない』とその頃から思っていた。
そんな二人は、鉄道の横転事故で帰らぬ人となった。
そして遺されたわたくしには莫大な遺産が残り、その遺産目当てに金の亡者が群がった。
その遺産を守るためにあらゆる勉強をし、その時受けたＩＳ適性テストでＡ＋が出し、
第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選ばれ、ここにやって来た。

そして出会った。理想の、強い瞳をした男と。

「織斑、一夏・・・・・・・・」

その名前を口にすると、胸が熱くなった。
この気持ちは何？　意識すると胸が一杯になる。
知りたい。その正体を、その向こう側を。　一夏の事を。
「（一夏さんの気を引くためにも明日の試合には絶対に勝ちませんと・・・・）」
わたくしはそう決心して、シャワー室を出た。

第１２話　フラグの予感？

（日本時刻　午前五時。頭部、腕部、胴部、脚部、異常なし。
内部臓器、異常なしシステム起動。視覚、正常に作動。
エネルギー・・・・残り僅か。）

まだ薄暗い朝、俺は起床し、半身を起こした。

「・・・・・・・・んっ・・・・・・・。」

隣から声が聞こえ、横を見ると昨日の変な格好ではなく、
パジャマを着た楯無が寝ていた。

「全く、あれだけ入ってくるなと言ったのに・・・・。」

かと言って、すでに過ぎてしまった事だ、どうこう言う気はない。
俺は、ベットに腰を掛けた姿勢になり、自分の調子について考えて
いた。

「（しかし、まさかエネルギーがもう底を着きかけるとは・・・・。
精神の不安定具合、無視出来るものではなくなってしまったか・・・
・。
最悪の場合、あのシステムの使用も視野に・・・・。）」

正直、あのシステム・・・・（ミッションシステム）は使用した
くない。
別に、体に負担を掛けるからではない。
なぜか、使用したくないと判断するからだ。なぜだろうか？
任務最優先の俺には最適なシステムなのに、なぜ使いたがらないの

だ、俺は？

「う・・・・う～ん。　ふあああああ・・・・・・。」

グルグルと自分に対する疑問の渦に飲まれていたとき、
楯無が大きな欠伸と共に起きた。

「よく寝たぁ～・・・・って、瀬山君、もう起きてたんだ。」

眠そうな顔で楯無が聞いてきた。　時刻を見ると、午前六時。
・・・・呆れた、俺は一時間も考え込んでいたのか・・・・。

「ああ。それから今思い出したのだが、寮の規則で
『男子の部屋に女子は泊めてはいけない』ってのがあったのだが・・
・・・。」

「えっと、破った場合は・・・・・（汗）」

楯無の顔が血の気を引いていく。多分、俺もだろう・・・・。

「織斑先生による懲罰だ、もう確実に死刑だ・・・。」

「ど、どうしよう・・・・・（うるうる、ガクガク）」

なんでだろう。鼓動が早くなってきた。それに泣かれたらこっち
も困る。
助けないと俺もあの世行きだ。

「とりあえず着替えろ。そして、誰にも見られないように部屋を出
て食堂に行ってろ。

後で行く。」

「う、うん・・・。じゃ、じゃあ着替えるから、あっち向いていてくれない？」

「？　なぜだ？」

「恥ずかしいからに決まってるからでしょ？デリカシーのない男の子は嫌われるわよ。」

「そ、そうなのか。すまん・・・・。」

そう言って、後ろを向く。楯無は「肉食なのか草食なのか・・・・」などと言って
こっそりと出て行った。何のことだったのだろうか？

食堂に、数分遅れてくると楯無が手を振って場所を示した。

「バレて無いな？」

「もちろん・・・・多分だけど・・・・。」

多分か、見つかってたら楯無は墓場、俺はスクラップ工場行きだ。

「それじゃ、朝食でもとろうよ。」

「ああ。」

そう言って、楯無は列に並ぶが、俺は少し違うところに行った。

「どこに行くの？」
「取りに行く物がある。それだけだ。」
そう言い残し。厨房の出入り口で、その物を受け取った。
戻ると、先に朝食を食べていた楯無が不思議そうに見てきた。
「水？　しかも二？・・・そんなに大量の水をどうするの？」
「飲む以外に何があるのだ？」
これが俺の朝食。と、言うと驚いたような声を上げた。
「水だけ！？　よく体がもつよね・・・・。」
「別に、毎日水だけとは言っていない。たまには他の物も摂っている。」
そんな事を話していると、周りの女子から「あれ誰？」とか「あの女子の情報を午後までに集めて！」とか「水だけって、凄い朝食よね・・・。」など色々聞こえたが無視した。
その後、楯無と別れた。別れ際に「今日の試合、見に行くわね。」と言っていたが、
本当の目的は、俺の戦闘能力の測定だろう。
そして、教室に行き普段と変わらず授業を受け、試合まで過ごした。

第１３話　勇ＶＳセシリア（前書き）

今回は長いうえ、グタグタです・・・。
読みづらいかもしれません、申し訳ありません。

ではどうぞ、

第１３話　勇ＶＳセシリア

午前、午後の授業が全て終わり、放課後を迎えた。
俺は、ラファール・イヴァイブを展開し動作確認をしていた。
「（ラファール、正常に作動。武装確認、マシンガン一丁、近接ブレード、
グレネード。厳しいな・・・。）」
ハイパーセンサーに映るデータを見ていると、一夏と箒がやってきた。
「勇、がんばれよ。セシリアはかなり強かったし、なによりあのビットが厄介だ。
気をつけろよ。」
「クラスメイトとして言うが、どこかの馬鹿みたいに負けるなよ。」
「・・・・・・・・・言われるまでもない。」
そう言った声に疲労が混じっていたのを一夏は見逃さなかった。
「どうしたんだ?疲れているみたいだが・・・・。」
「何でも、ない。・・・時間だ。発進する。」
俺は何かから逃げるように、カタパルトに接続し発進した。
ピットから出ると、既にセシリアが待機していた。

すると、前回と機体性能が僅かに違う事に気が付いた。
「（機体性能が僅かに上昇している？操縦者にも心理的変化が見られる・・・
やはりＩＳは操縦者の心理状態によって性能が変化するみたいだな・・・・）」
ＩＳの特殊性を再確認しつつ、セシリアと同じ高度まで上昇した。
「全力で行きますわよ。」
「・・・・当然だ。こちらも本気で行く。」
『ビーッ！　試合開始！』
試合開始の合図と同時に俺はマシンガンを召喚した。
ガガガガガガッ！
重い音と共に弾丸が発射された。
だが、セシリアはすぐに回避しビットを射出してきた。
「（データ参照・・・・以前と攻撃法、ビットの配置に大きな変化はなし・・・・。）」
昨日の一夏との戦闘のように、二機ワンペアで多角的な直線運動で迫ってきた。
「さぁ、あなたにこの攻撃が回避できますかしら？」

「・・・・・・・・その攻撃は既に分析済みだ。」

ビットが止まりレーザーを発射する。が、俺は発射するより速く回避した。

ビュンビュン、とビットレーザーとセシリアが持つ大型ライフル『スターライトｍｋ？』のレーザーが飛んでくるが、俺には一発も当たらない。

「何ですって！？あの攻撃を全て避けきるなんて・・・・！？」

「（敵操縦者に動揺、混乱、焦りの心拍数を感知。格闘戦に持ち込む。）」

一瞬の隙を突き、一気にセシリアに接近する。が、

「くっ、行きなさい！」

スカートが動き、ミサイルビットが飛んできた。

「ちっ・・・・攻撃中断。回避運動に移行する。」

真横に回避し、上昇するがミサイルはしつこく追ってきた。

「・・・・計算終了。このまま逃げれば約１５，３秒後に着弾する。回避運動から迎撃行動に移行する。目標、後方のミサイル二機。」

くるりと、体の向きを変えミサイルに向かってピンを抜いたグレネードを

２個投げ、

「（４・・・３・・・２・・・１・・・発射。）」

バン、バン！

その４秒後、投げたグレネードをマシンガンで撃った。

キュン、キュインッ・・・・・・・ドガァァァァンッ！

２個のグレネードの爆発で、ミサイルが爆風に巻き込まれ爆散した。

かのように思われた。

「（警告！？バカな！俺が計算を間違えたのか！？）」

一発のミサイルがこちらに向かって飛んできた。

俺は、避けなかった、いや避けれなかった。

ズドォォォォン！！

着弾し、派手に爆発が起き、視界が真っ赤になった。

そして、アリーナの上空から落下し始めた。

俺は、混乱していた。

「（ミスは死だ・・・・テロリストの時から叩き込んできた鉄則を俺は犯した。

何故だ・・・・不安定なココロが俺を狂わせているのか？　違う、断じて違うはずだ。

俺に、ココロなんて無い。俺は、戦闘マシーンだ・・・・何故なんだ・・・・。）」

最近の不安定さが、こうも調子を狂わせるなんて・・・・。
落下を続けているとハイパーセンサーの隅にピットからのモニターが現れ、
モニターの中で一夏が叫んでいた。

『勇！速く上昇しろ！激突するぞ！』

俺は、ハッ、として地面ギリギリで体勢を立て直すと、
目の前に、レーザーを発射しかけているビットがあった

ビュン！

レーザーが発射され、右肩と左足に当たった。
すると、なぜか焼けるような痛みが走った。

「グウッ！？・・・・なんだ？」

センサーには、

『ダメージ１８８。シールドエネルギー残量、４』

と表示されているだけだった。

「（装甲を貫いたのか？・・・いや、装甲はミサイルでのダメージはあるが、
破壊はされていない・・・。絶対防御を貫いたのか？
・・・いや、あの武装にそのような威力はないはずだ・・・・。）

」

「隙だらけですわよ！」

セシリアの声が聞こえ、俺は急いで上昇した。

「ダメージが響いてますわね。トドメを刺してあげますわよ！」

「ちっ。」

マシンガンで迎撃するが、損傷していたため数発撃ったら壊れてしまった。

近接ブレードを展開しつつも出来るのはビットを斬る位だ。

気が付くとアリーナの高度ギリギリで戦っていた。

その時、脚部スラスターが爆発し、センサーに警告を表すアラームが鳴り響いた。

「脚部スラスター爆発。システムエラー。制御不可。落下する・・・・。」

スラスターが黒煙を上げながら今日二度目の落下となった。

システムもダウンしているため装甲は展開してあるも、センサー類は死んでいる。

加えこの高度だ、地面に激突したら・・・死ぬな。

『セシリア！　瀬山を救出しろッ！ヤツのＩＳはセンサーが全て死んでいる、

絶対防御も発動しない！」

スピーカーから織斑先生の声が聞こえ、セシリアが俺を追って急降下してきた。
俺を捕まえるために手を伸ばしてきたが、最悪のことが起きた。

ボンッ！

背中のスラスターが爆発し、全身の装甲にヒビが入り落下速度が増した。
装甲の破片をばら撒きながら落下していった。観客席からは悲鳴が聞こえた。
そして、俺は目を瞑り

ズドォォォォォォォン・・・・・・・・！！

隕石が落下したような音を出して、地面に激突した。

第１４話　墜落、その後。

ＳＩＤＥ・・・一夏

勇がピットから出て行った後、俺と箒はピット内に戻って観戦していた。
開始してすぐに、俺が苦戦したあのビット攻撃が来たが、勇は余裕で回避していた。

「凄いですねぇ、瀬山君。あの攻撃を避けるなんて・・・・。」

山田先生がため息混じりに呟いていた。
俺もそう思った。俺と同じＩＳの起動経験が二回とは思えないほど上手に、
しかも、量産機であのセシリアと対等に戦っているのだから・・・・。

「マジかよ・・・・・俺は専用機でギリギリだったのに、勇、量産機でセシリアと
互角なんて・・・・・。」

そう言わずにはいられなかった。だが、千冬姉は違っていた。

「いや、互角じゃない。瀬山の方が押している。」

「なぜ瀬山の方が押していると？」

箒が聞いた。すると千冬姉は説明し始めた。

「なぜなら、あいつは攻撃する直前にはもう回避している。無駄なくだ。
つまり既に、セシリアの攻撃パターンや方法を見切っているという事だ。」

「一回見ただけで見切れるなんて相当の事だがな」と付け足しながら言った。
つまり、勇は前の俺との試合の時にセシリアの攻撃の特徴やパターンを
完全に暗記したって事か！？
驚きながら見ていると、セシリアも驚き、一瞬だが隙ができた。
それを勇は見逃さず一気に接近してきた。
慌てたセシリアはブルーティアーズのスカートに付いているミサイルを発射された。
それを勇は、上昇して逃げたが、ミサイルはぐんぐん接近していった。
勇は、投げたグレネードを撃ち、爆発の衝撃でミサイルを二機とも撃墜した。
と、思っていたが、一機が爆発の衝撃に巻き込まれずそのまま直進していった。
勇は避けなかった。余裕で避けれた筈なのに・・・・
まるで金縛りにでもあったかのように呆然としていた。

ドカァァァァン！！

と、ミサイルが直撃し、煙の中からラファール・リヴァイブが落ちていった。
気絶しているのか、ピクリとも動かずどんどん落ちていった。
俺はインカムを使い通信を入れた。

「勇！速く上昇しろ！激突するぞ！」

すると、目が覚めたのか、体勢を立て直したが、そこを狙ってきたセシリアの
ビット攻撃を食らってしまった。
その後から、勇の調子が悪くなり、ビットの攻撃を避けるので精一杯の感じになった。
上昇しながら回避していると、ラファールの脚のスラスターが爆発した。

『脚部スラスター爆発。システムエラー。落下する・・・・。』

と抑揚のない声の通信が入り、その後はガーガーとノイズが走るだけになった。

「瀬山君！瀬山君！応答してください！」

必死に山田先生が呼びかけるが、ノイズが聞こえるだけだった。
その間にも、勇は落下を続けていた。

「セシリア！瀬山を救出しろッ！やつのＩＳはセンサーが全て死んでいる！
絶対防御も発動しない！」

珍しく千冬姉の慌てた声で指示を出した。
セシリアは急速に勇に近づいていったが、

ボンッ！　と背中のスラスターまで爆発し、勇はさらに加速し、
地面に激突した。

俺は白式を起動させ、アリーナに転がるように飛び出していた。
クレーターのふちに立って中を覗くと、起き上がる勇がいた。

「勇！」

「・・・・・一夏か。」

勇に肩を貸しながらクレーターから出ると、セシリアが蒼白は顔で近づいてきた。

「だ、大丈夫ですの！？」

「左足が折れた。他にも内臓の一部が損傷している可能性がある。」

足を見ると、左足がおかしな方向に曲がっていた。

「一夏。座らせてくれ。」

「あ、ああ」

座って何をするつもりだ？と思っていると、勇は折れている部分を引っ張り始めた。

「お、おいよせ！」

「ショックで死にますわよ！」

勇は無視し、引っ張り続け、バキン、と骨を無理矢理くっ付けた音が響いた

「うっ・・・・・・。」

「ひっ・・・・・・・・。」

俺は吐き気がし、セシリアは腰を抜かした。

「これで歩行に支障はない。あとは救助隊に任す。」

そう言って、救助隊が来るまでずっと待った。

俺たちは声をかけられなかった。　あまりに非常識すぎるぞ・・・・・

第１４話　墜落、その後。（後書き）

感想をお待ちしてます！

第15話　フラグ立っちゃったよ・・・・・。

ＳＩＤＥ・・・勇

墜落後、救助隊が来た。そして、治療室に連れて行かれた。
治療室でレントゲンなどを撮られた。

「う～ん。全身に骨折、ひびがあるわね。内臓は無事だけど、
よくあんな高度から落ちて無事だったといえるわね。」

などブツブツ言いながら治療室の先生は包帯を巻いていた。
だた、気がかりだったのは。

「でも、この肩の傷は分からないわね・・・・。
なんでここだけこんなに重度の火傷があるのかしら？」

そこは、セシリアのビット攻撃を受けた部分だった。俺にもよく
分からない。

「（このことは放って置くとしよう・・・・。）」

そして、俺は、

「（任務、自身の精神的不安定さより無期延期にする。
今後は、データ収集のみ実行する。）」

俺の任務が成功する確率が今現在では低いと判断し無期の延期を
決定した。
すると、少し気が楽になった気がした。

「寝るか・・・」

そう言って寝ようとした時、

バタンッ！

とドアが勢いよく開けられた。誰だと思って起きると、一夏、箒、セシリアがいた。

「「「勇（さん）！大丈夫なのか（ですか）！？」」」

三人揃って同じ事を口にした。

「ああ。明日からでも普通に動けるくらいらしい。」

「良かった・・・。クラスのみんな心配してたんだぞ。俺も箒もセシリアも。」

「すまなかった。それよりも・・・・」

俺はセシリアを見て言った。

「条件だったな。負けたら奴隷だって。明日から好きにしろ。」

戦う前の条件を言うとセシリアが慌て始めた。

「えっと、その・・・・あの時は頭に血が上っていて・・・・その、もういいです。」

「？？？　もういいとは？」

「奴隷にならなくて結構ってことです。あなたはクラスメイト、いいえ友人
それで十分ですわ。」

「そうか・・・・。」

その後は、一夏たちと少し話をした。
そのあと、一夏たちが去った後、再びドアが叩かれた。
そして入ってきたのは、更識楯無だった。

「ちゃお♪　大丈夫だった？」

「ああ。明日からでも動ける。」

すると、楯無は扇子を取り出した扇子には『驚愕』の二文字。

「しかし、驚いちゃったよ。量産機で専用機の攻撃を避けるなんてね。」

「やつの攻撃パターンを読んだまでだ。」

「でも、一度見ただけであそこまで避けられるんて凄いことよ。私でも無理だわ。」

「だが、所詮俺もＩＳに不慣れな生徒だ。結局負けたがな。」

すると、楯無が微笑んだ。

「そうなのかなぁ～？まあ、それよりも・・・・・。」

「『友人』って言われて嬉しかったの？」

気づいていたのか。

「外から見てたけどね、友人やクラスメイトって言われているとき、嬉しいと言うより驚いたって感じがしたけど。」

「初めてだ。俺を友人などと言ってくれたのは・・・・・。」

「へぇ～。私も勇のことを友達だと思ってるし、もしかしたら好きな人になるかも。」

「監視対象だった俺をか？」

「最初はね。だけど会っていくうちにだんだん勇と一緒にいるのが面白くなってきて・・・・」

「こんな機械みたいな俺と？」

理解不能。大抵の人間ならすぐに興味を失う筈なんだがな・・・・。

「違う。勇は機械じゃない。ただ、私からは無理をしているような感じがするだけ。」

確かに今までは無理をしていたのかもしれない。だが今後は軽くなるはずだ。

「つまり、どういう事だ？」

「もう、鈍感ね。要するにあなたの事が好きってことよ。」

はっ？

「だ～か～ら。あなたのことが好きなの。」

フリーズ、と言う表現が最も正しい状態になった。

16話　それぞれの変化

楯無からの告白を受けた、次の日の朝、俺はどうしたものかと悩んでいた。

「（この場合、どうすればいいんだ？同じように『好き』と言えばいいのか？）」

俺は相手を『好き』になると言うことがよく分からない。
ただ、楯無と一緒にいるときに、鼓動が早くなるのだけは分かっていた。
一夏たちと一緒にいるときの体の奥底が温まるような感じとはまた違う感じだった。
その二つとも、何なのかは分からなかが楯無の告白を受けたとき、そのひとつが分かった
俺も、どうやら楯無と一緒にいることを好ましく思っているようだ。
このことを、『相手が好き』といっていいだろう。だったら、俺も今度言おうと思う。

『好きだ』と。

不思議なものだ、任務のことを忘れた途端、急に楽になったのだからな。
このまま、任務のことを忘れ去ってしまいたい。
今の感覚は今まで味わったことの無いくらい気持ちのいいものだ。
すると、扉が開き治療室の先生が来た。

「おはようございます。今から、体の最終検査をします。治り具合によって

学園に行けるか判断しますから。でも、今日はたぶん無理だと思いますが。」

どうだか。一夏たちに言った事は俺が自分で判断していったこと。恐らく、もうほとんどの部分は治癒が完了しているはずだ。

「えっ！？、ほとんど完治している！？あり得ない・・・！？」

どうやら、俺の再生能力に驚いているようだ。

「結果はどうなんです？」

「えっ？ええ・・・・。と、とりあえず大丈夫でしょう。ただ、肩と足の火傷はまだ治ってませんから。」

「了解・・・・。」

おかしい、なぜ右肩と左足の火傷だけ治りが遅いんだ？気になったが、答えなんて考えても分からないので放っておいた。

俺は、学園に行く用意をするために一度自分の部屋に戻った。

教室に来ると、セシリアと箒が睨み合っていた。

「・・・・・・何の喧嘩だ？」

「さぁ・・・・俺が代表になって、セシリアが『ＩＳについて教えてあげます』って言ったら箒が、『自分で足りている！』って反論したんだ。そ

んで今の状態だ。」

・・・・・まぁ、いがみ合って当然なのかもしれない。何せ、二人とも一夏のことを気にしているようだからな。

「しかし、セシリアのやつ、俺の事を名前で呼んだんだ。どういう心境の変化なんだか・・・・。」

鈍感ってやつなのか？

「まぁ、心境が変わったって言えば勇もだよな。」

「俺が？」

「ああ。いつもと違って、なんかこう、スッキリした表情をしてるからな。」

何でこいつはこうも簡単に人の心の中の事を見抜くんだ。まったく、理解不能だ。

そんな会話をしていると、二人はやってきた織斑先生に出席簿で叩かれた。

そして、いつものような日が始まった。

俺は、このまま任務の事を忘れ、こんな日々が続けばいいと思っていた。

だが、そんな日々はすぐに終わってしまった・・・・。

第17話　再び、激突、衝突！

ＳＩＤＥ・・・勇

「これよりＩＳの基本的な飛行操縦をしてもらう。織斑、オルコット、瀬山、試しに飛んでみせろ。」

四月の下旬、俺たちはＩＳの飛行実習をしていた。専用機持ちの一夏とセシリアは、手本になって当然なのだが・・・・・。

「先生、なぜ俺までしなければならないのですか？」

なぜか、俺も『打鉄』を装備させられていた。

「当然だ。上手な奴であれば誰であろうと手本になってもらう。文句は？」

「・・・・・・・・・無いです。」

逆らっても、痛い目見るだけ・・・・。出席簿の角で叩かれるのはもう勘弁だ・・・・。

「遅いぞ。織斑。オルコットと瀬山は既に展開し終わってるぞ。」

「わ、分かりました。」

一夏は急かされながら、右腕のガントレットを左手でつかんだ。

すると、光に包まれ、白式を装備した一夏が現れた。
相変わらず、綺麗なＩＳだな・・・・・。
セシリアも専用ＩＳ『ブルー・ティアーズ』を展開していた。
俺と一夏の戦いで損傷したビットは既に修復してあった。

「よし、飛べ。」

そう言われて、セシリアはすぐに急上昇した。流石、代表候補生。
行動が素早い。
俺も急上昇しているものの、専用機と量産機にはスペックに差があ
りすぎるため、
とてもじゃないがセシリアにはついて行けなかった。

「何をやっている。スペック上出力は白式の方が上だぞ。」

下を見ると、一夏の白式がノロノロと上がってきた。

「どうした？やけに遅いが？」

「いまいちイメージが掴めないんだよ・・・。自分の前に円錐をイ
メージするって言われてもな・・・・。」

「一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を探
す方がいいですわよ。」

セシリアが説明した。

「一夏。別にイメージではなくて、実際にあるものを使ったらどう

だ？」

「あるものって？」

「例を挙げるなら、浮かんでいる雲を目指してみるとか、
何も無い場合は宇宙を目指してみるとか。」

「勇さんの言うことも、一つの方法ですわ。もっとも、前者はともかく、後者は下手をすると
本当に宇宙に出てしまうかもしれないですが・・・・・。」

「そう言われてもなぁ・・・空を飛ぶっていう感覚がイマイチよく分からん。
なんで浮いてるんだこれ？」

・・・・・・説明するのに2～3時間、要求する。ちなみに、飛んでいる原理をまとめると
原稿用紙が数十枚から数百枚の量になる。しかも文字は電話帳ほどの大きさ。

「説明しても構いませんが、長いですわよ？
反重力力翼、流動派干渉の話になりますから。」

「・・・・遠慮しとく。絶対、ついていけない。」

「そう、残念ですわ、ふふっ。」

あの試合以来、セシリアは一夏を意識し始めた。楯無との一件もある俺には、
何となく分かるが・・・・。

「？？？」

対する一夏は、超鈍感だ。意識されていることにすら気づいていない。

セシリアは結構、積極的にアピールしているらしい。この前も練習に付き合っていたし。

「また今度、指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで・・・・・」

『一夏っ！何時までそこにいる！早く降りて来い！』

かなり大きい怒声が通信回線から聞こえた。声の主は・・・、言わずとも箒しかいない。

地上を見ると、箒が山田先生からインカムを奪い取っていた。

山田先生はおたおたしていた。

箒は怒っているようにも見えるが、羨ましそうにも見える。

確かに、意中の相手が別の女子と一緒に空中にいるのは、好ましく無いらしい。

『織斑、オルコット、瀬山。急降下と緊急停止をやって見せろ。目標は地表から１０センチだ。』

なんとも難易度の高いことを・・・・・。まあ、俺には造作も無いが。

「了解です。では、一夏さん。お先に。」

そう言うと、セシリアは地上に向かった。

・・・・緊急停止完了。地表から、約１１．２センチか。

「一夏、先に行く。」

「おう、また、地面に激突すんなよ。」

「了解。」

俺も、急降下を開始した。センサーには地上までの距離が示されていた。

「（地上まで・・・・・５００メートル・・・・４００・・・３００・・・２００・・１００、５０。）」

５０メートルを切り、緊急停止を行い停止した。地上までは・・・・・

「織斑先生。１０センチで停止しました。確認を。」

「そうか・・・・よし、確かに１０センチだ。１ミリの狂いもなくな・・・・。」

まだ、疑われているのか・・・・。もう任務は中止した。

と言うより封印した。任務に関することは全て。もちろんミッションモードも含め全てだ。

「（どうしたら疑いを晴らせるのだろうか？）」

一人離れた場所でそんな事を考えていると、突然、警告音&通信が入った。

『う、うわあああああっ！　勇、どいてくれーっ！！』

何だと思って上を見ると近くに、いや目目と鼻の先と言う表現が正しいのだろうか。

急降下してきて、緊急停止に失敗した一夏が、俺に突っ込んできた。

「い、いち・・・・・・・・・」

ズドオオオオオオンッ！

俺と激突しながら、地面にクレーターを作った。思ったのだが、俺は何かと激突しやすい体質なのか？

入学して、二度も激突するのは、俺が初めてだと思う・・・・・・・。

だい18話　女子の事情

ＳＩＤＥ・・・一夏

「う、うわあああああっ！勇、どいてくれーっ！」

しくじったぁぁぁっ！！　イメージするのに集中しすぎて止まることを
考えてなかったぁぁ！　しかも、進む先には勇がいるしっ！

ズドオオオオオオンッ！

俺は、勇を巻き込みながら、盛大に地面に突っ込んだ・・・。

「う・・・・・・うーん。」

目を開けると、勇がクレーターの壁にめり込んでいた。
壁から剥がすと見事に人の形をした穴ができていた。
凄ぇ、こんなの某ネコとネズミの追いかけっことかでしか見たこと無いぞ
現実でできるんだ・・・・・・・・・。

「あー、大丈夫か勇？イメージしすぎてな、止まることを考えてなかったんだ・・・・。」

すると、勇はため息をつき

「・・・・・・・下手くそ。」

けっこーなダメージを受けることを言った。

「はい・・・・下手ですみません・・・・・・。」

「別に怒っているわけじゃない。もっと練習して上手くなってくれ。上に戻るぞ。」

そして、上がって俺たちを待っていたのはクラスメイトによるくすくす笑いだった。

勇は何も気にしていない様子だったが、俺は既に瀕死状態だ。

衝撃から体を守るだけでなく心も守ってほしい・・・・。

「馬鹿者。グラウンドに穴を開けてどうする。あとで二人で埋めておけ。」

「「了解・・・・・・。」」

あの大穴を俺と勇だけで埋めるのか・・・明日は筋肉痛になりそうだな・・・。

「情けないぞ一夏。昨日私が教えてやったではないか。」

「教えたって、あの擬音の事か？」

箒も冗談が言えるようになったんだな。

「貴様、何か失礼なことでも考えているな・・・・・・（ゴゴゴゴ）」

何で、こうも簡単にバレるんだろう・・・・・。
「大体、一夏。お前と言う奴は昔から・・・・・・・・・・・・・」
箒が小言を言っているところに、
「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」
セシリアが遮るように俺に聞いてきた。
「あ、ああ。大丈夫だけど・・・・・。」
「そう。それは何よりですわ。」
そう言うと、楽しそうに微笑む。気まぐれなのか心境の変化なのか最近、こう言っては俺にくっついて来る。
女子の気持ちってよくわからねぇー。
「・・・・ＩＳを装備していて怪我などするわけがないだろう・・・・。」
「あら、篠ノ乃さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがＩＳを装備していてもですわ。常識でしょ。」
「お前が言うか。この猫かぶりめ。」
「鬼の皮を被っているよりはマシですわ。」
・・・・目の錯覚かな？今、火花と言うより二人の背後に燃え盛

る炎が

見えたような見えなかったような・・・？

というか、この二人、日増しに仲が悪くなっている気がするんだが？

「なあ勇。何があったと思う？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何だ、その残念そうな目は？俺、何かマズいこと言った？

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ、端っこでやっていろ。」

千冬姉が箒とセシリアを押しのけて、俺の前に立つ。

どうやら、まだまだ今日の訓練は続くみたいだ・・・。

だい１８話　女子の事情（後書き）

どうも、ＷＩＮＧです。

この度、一ヶ月近く更新を止めてしまい、申し訳ありませんでした。

今後、少しずつ更新のペースを取り戻して行きたいと思いますので、

これからも応援よろしくお願いします。

第１９話　記録

ＳＩＤＥ・・・勇

　次の訓練は武器の展開みたいだ。
だが、俺が今装着している『打鉄』には近接用ブレード、しかも
最初から展開済みの一つしかないため、今回の訓練は大人しく見て
いるしかない。
　それより・・・・

「（おかしい・・・・・。さっきから変な写真のようなものが途切れ
途切れに現れる・・・・？）」

　・・・・また現れた。今度は、誰かが俺に指示しているような写
真だ。
陰になって誰か分からないがシルエットからして、女性。
・・・・・二枚目が現れた。これは・・・・・たしかテロリストだ
った頃に、
どこかの軍基地のＩＳを破壊しようとした時、眼帯をした一人の軍
人にやられそうに
なって一人脱出したときのだ。
・・・・・・・これは・・・・なんだ？この散らかった部屋は？
そして、俺が装着しているＩＳは何だ？見たことが無い。
そして、その目の前でディスプレイを見ている女性は誰だ？
　そして、写真は消えた。こんな感じで、俺のメモリーに記録され
ている記録もあるが、
全く見に覚えのない記録もいくつかあり、疑問だらけになる。

「（なんで、こんな記録があるのだ？そもそも、なぜ今、こんな記

録が出現したのだ？）」

バグの可能性もあったので、スキャンしてみた。

数十秒後、機械的な音声が聞こえた。俺が言えた事ではないが・・・・。

（メモリー、記憶関連の部分のバグ、発見できず。今後の生活に支障なし。）

・・・・・やはり、バグではないか。じゃあ、一体何なんだ？

「・・・・・せ、・・やま。せや・・・ま。瀬山！！」

バシン！！

「ッ！！！！！！」

突然の激痛で頭を抱えこんだ。顔を上げると、織斑先生が立っていた。

「・・・・・・・・・超痛いです・・・・・。何も角で叩かなくても・・・・。」

「お前が、いつまでも呆けているからだ。今日の授業は終わりだ。織斑と二人でグラウンドを片付けておくように。」

「了解。いつつ・・・・・」

まだ、頭がジンジンする。コブが出来ていないと良いが・・・・。いててて・・・・。

ＳＩＤＥ・・・一夏

また、叩かれている。いつみても痛そうだな、あれ。
っと、叩かれないうちにさっさと片付けてしまおう。

「いたたた・・・・。すまん一夏。さっさと片付けてしまおう。」

「そうだな。しかし、どうしたんだ？」

「言うなれば、激突の衝撃で色々と記録が飛んだり出てきたりして困ってた。」

「イコール俺のせいって事かよ・・・・・・・・・・。」

冗談だ。と勇は言っているが、明らかに俺のせいで頭の中混乱したんだろ。
そして、穴を埋めるための土を運んできて、穴を埋める作業を始めた。
だけど、自分で作っておきながらなんつー大穴をあけたんだ俺。
作業をしていると、

「なぁ、一夏。お前、セシリアとはどういう間柄なんだ？」

「え？どうしたんだいきなり？」

「いや、対戦する前までは険悪だったのに、終わってみれば仲良くなっている。
何かあったのかな。と思っただけだ。」

「さぁ？俺は何もしていないけど、気が付いたら仲良くなっていた。今の間柄というと、クラスメイト、というより、友達のほうがしっくりくるかな？」

「・・・・・そうか（鈍感だ）。なら、俺はお前にとっての何なのだ？」

「は？」

なんで、状況が分からなくなったときにはハ行の言葉がよくでるんだろう。

「それは、俺と同じ世界でＩＳを動かせる男子で、クラスメイトで、友達、だろ？」

「・・・・・・・・そうか。」

「どうしたんだ今更？勇らしくないぞ。」

「そうかもな。悪い変なことを聞いて。今のことは忘れてくれ。」

「あ、ああ。」

変なの。やっぱ、俺がぶつかったのが効いているのかな？

「・・・・・・・・・友達、か・・・・・・・・・・・・・・」

勇が何か言ったような気がしたが、作業に集中していたので聞こえなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2919u/

ＩＳ　織斑一夏ともう一人

2011年12月11日20時49分発行